

芥川龍之介聴講ノート
「支那戯曲講義 塩谷温助教授」翻刻（2）

篠崎美生子・田中靖彦・楊志輝・林佩君・庄司達也

Reprinting AKUTAGAWA Ryunosuke's Note
on the Lecture

“The Lecture about Chinese Drama”

by Associate Professor SHIONOYA On No.2

Shinozaki Mioko /Tanaka Yasuhiko/Yang Zhihui/
Lin Peijun/Shoji Tatsuya

前号に引き続き、芥川龍之介が1910年代に東京帝国大学で聴講した授業のノート「支那戯曲講義 塩谷温」（山梨県立文学館蔵）の翻刻を行い影印とともに示す。このノートの翻刻を手がかりに、日本近代の知識人が「中国」に関するどのような「知」と「イメージ」を享受したかを考察していきたい。

キーワード：芥川龍之介 塩谷温 中国 戯曲 西廂記

Key words : AKUTAGAWA Ryunosuke SHIONOYA On China Drama Xi xiang ji

はじめに

本稿は、芥川龍之介の聴講ノート¹「支那戯曲講義 塩谷温助教授」（山梨県立文学館蔵）について、その内容を影印で紹介し、翻刻することを第一の目的とするものである。

前号および今号掲載の翻刻を行うにあたって、我々は複数の『西廂記』や『西廂記』解説書を参照した。末尾に参考書として示したように、芥川らに授業を行った塩谷温自身の手になる書物も少なくない。そのうち、昌平公司

から1947年9月に刊行された『西廂記』（限定300部）には、塩谷と『陳眉公批評西廂記』との出会いが以下のように回想されている。

明治の末、余が笈を湖南に負ひ、葉煥彬先生に従つて元曲を学べる際偶々北京発行の同人雑誌「燕塵」に同地留学中の亡友、宮原天樵の第六才子書の歌訳を読み、一読快と称し、遙に之が唱和を試みたり。（中略）帰朝の際、上海にて贖へる縮刷影印の陳眉公批評西廂記を天樵に贈りしに、天樵は早速西廂歌劇を出版せり。（中略）それよりは外出する毎に、陳眉公本を懐にして、電車の上といはず応接間の中といはず、随所随所に曲の歌訳につとめ、力を用ふること久しく、数年の間に一応完了はしたれども、余の学究的な徒らに原文の対訳に捉はれて露骨に陥り、格は七五調の他に出でず、千篇一律、感想無味なること蠅を囓む如く、到底読むに堪へざりき。

塩谷の帰国は1912年、芥川の大学卒業は1916年、ちょうど芥川らが「支那戯曲講義」を聴講したときは、塩谷が『陳眉公批評西廂記』を肌身離さず持ち歩いて歌訳に努めていた時期と重なることになる。

ちなみに塩谷が購入し、友人にも贈ったという「陳眉公批評西廂記」（引用文中）とは、出版年に照らして、宣統3年（1911年）上海国学扶輪社印行の『精刊陳眉公批評西廂記原本』であると考えられるが、このたび、同じものが日本近代文学館の「芥川龍之介文庫」（以下「芥川文庫」）に含まれていることを確認した²。「芥川文庫」は1964年に芥川龍之介の遺族によって日本近代文学館に寄託（1970年に寄贈に切り替え）された「原稿・草稿・ノート・遺品」等及び「旧蔵書」³である。和書の多くは生前に他者に贈られたとのことだが、それでも大量の漢文、英文の書物が残されている。その中に、『精刊陳眉公批評西廂記原本』（上下）が含まれていたのである。

本文はもちろん白文だが、「芥川文庫」所蔵のものは、さらに赤鉛筆で句点が強調されていたり、ペンで返り点や送り仮名が付されていたりして、全体を通してかなり熱心に読まれた形跡がある。

この本を、いつどこで芥川が入手したかは確認できていないが、聴講ノートの内容、文言と本書の記述に重なるところが少なくないところから、これが塩谷の「西廂記講義」の教科書として用いられた可能性も十分に考えられそうだ。本書の流通経路も視野に入れつつ、今後の調査を進めていきたいと考えている。

「芥川文庫」には、清代から民国時代にかけて刊行された漢書（日本で刊行された漢詩漢文の書物を除く）が130冊ほどあり、うち、訪中以前に読まれたものものが少なくないことは、芥川のテキストに即して既に論証されている⁴。それらの入手経路を、帝国大学の授業内容と合わせて検証することで、1910～20年代の日本の知識人の「中国」表象の形成、展開がいかなるものかを、追って明らかにしていきたい。

前回、芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」(1)～(16)の翻刻を行ったのに続き、今回は(17)～(31)ページを翻刻した。今回の講義は、「西廂記」において、科挙合格をめざす書生張生が、旅先の寺の「西廂」に滞在する令嬢鶯鶯を垣間見て一目惚れし、鶯鶯の侍女である紅娘を介して鶯鶯に近づこうとする場面にあたる。父を亡くしたばかりの鶯鶯が住職の法本に法要を依頼したことにかこつけて、張生も自分の父母の法要を願い出、その席で鶯鶯と同席することを企んだり、紅娘が張生や法本をやり込めたりするところに面白みがあるようだ。

今回の翻刻に当たっても、上原究一氏（山梨大学・中国文学、書誌学）に多くのご教示を賜ったほか、山梨県立文学館には聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」の閲覧、撮影に際し、多大な便宜をはかっていただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

凡例

- ・原則として漢字は新字体を採用した。
- ・句読点は、「。」、「、」を分け、原文の通りに表記した。
- ・改行については、原則として原文に従った。ただし、字数の制限から2行にわたった箇所もある。
- ・挿入された部分、削除・訂正を施された部分は特に記さず、原文から考えられる完成体を示した。
- ・誤記と思われる場合もそのまま翻刻し、ルビ「ママ」を付した。難読箇所は□で示した。

注 本資料では、見開きの片面にのみ記述がある場合と、見開き両面に記述がある場合とがある。今回はそのうち、なんらかの記述があるページにのみ

便宜上のページ数を付して影印を紹介し、翻刻を施した。そのため、このページ数は、ノート of 総ページ数よりも少ない。

また、本資料は、最初の6ページまでが横書きで、その後は縦書きになっている。今回掲載分は、すべて縦書きであるが、本紀要誌面構成との兼ね合いから、読みづらさが生じることをご了解いただきたい。

また、本報告においては「支那」という用語を多用せざるを得ないが、研究上のこととしてご容赦いただきたい。

ノートについて

縦21.3cm、横16.8cm。1ページあたりの行数は23行。総ページ数は、表紙と裏表紙をふくめて118頁。

(17)

(17)

西廂記講義

題目総名

張君瑞巧做東床婿

法本師住持南禅地

老夫人閨宴北堂春

崔鶯々待月西廂記

第一本題目正名

老夫人閨春院

崔鶯々燒夜香

小紅娘伝好事(好事は法要也)

張君瑞鬧道場

之より張君瑞鬧道場雜劇と称し又題目総名として崔鶯々待月西廂記となす

将ヲバ 将這靈樞

好生 甚 頗

因此上 これによつて

盼 のぞめども

么篇は南曲の前腔 前曲賞花時を用ふ也

可正是 正是

蒲郡 蒲郡の誤 河中府

耍シ あそぶ 玩耍 おもちゃ

(18)

(18)

前朝	徳宗の前の天子
針指	繡
女工	女紅也 縫衣

則天娘々	即則天武后
------	-------

香花院	檀那寺
-----	-----

西廂	西の別院
----	------

一壁	一面には
----	------

食前方丈	孟子の語
------	------

子孤	
----	--

母孀	
----	--

概樞	旅上の樞
----	------

盼不到	盼望不能堪
-----	-------

聞散心耍 ^シ	遊んで気をはらす
-------------------	----------

蕭寺	蕭寂寺也 梁の武帝の寺となすは非也
----	-------------------

着	助字無意味 鎮守着蕭関
---	-------------

就	即
---	---

(19)

(19)

般似_{||}如

把_ヲ

除_{たゞ}

也_{また}

琴童_{書童} page也

取_応 応試也

状元_{進士の試の首席也}

刮身垢磨心光

中原_{黄河の南北岸} 遊芸 遊学

脚根_{無線} 足跡不完

転蓬_{蓬の一種の名} 風にあへば花実枝葉散落と云ふ

之を韻に合せしむる為に逆に用ふ

棘_圃 即試場也

九曲_{黄河九曲と称す}

顕_{顯著}

偏_{ひとへにこの地のみ} 即風涛の険 この地を最とす

竹索_綱 浮橋 舟橋をかくる也

潰_{灌する也}

緊不緊_{速不速}

以上_{生の才大なるを云ふ}

淵泉_{水源也}

不_離 此_還 穿

也曾_{||} 我便要 (金聖歎本)

(20)

(20)

者 命令詞 せよ
那裡 何処か
店小二哥 小僮也
甚ウ 甚麼 ナンノ
座 一座ウ 個の也
那里 かのうち
立地 立ち 地意なし
鎖匙 鍵
師父 亦かへりきたらむ
頭房 一番室
撒和 荷をおろす
香積廚 寺の櫛 廚
北人呼神為賢聖とす

似 這般如斯
彈 たれて
壁 処
階家 我等
偌 如斯
剛 正に

(21)

(21)

以下訳

那 移

剛々好 正に

好着 甚

兀的 如何が

勝如 勝る

顛不刺的 元代の俗語 発語辞

見了萬千女

如斯美人之顔未曾見

使人眼花撩乱人而使如唾 心去而在天外

彼女立彼處而任人調戲

離恨天寓才子佳人相離在之地

宮様 如宮人眉

腴腆 含羞

桜桃 樊素口

楊柳小蛮腰 楽天 (樊素 小蛮 楽天
之小妾也)

梗 白げし米

旖旎 旗のなびく形

恰 just

胡说 戲言 don't joke sir

模樣兒 容子

she is there, you are here, it's a distance between you & she

小脚兒 五代以降の風習

襯 残紅之芳径

(22)

(22)

底様兒

footprint 〓 脚跡兒

且休云眼眸留情処

慢俄延 徐々然

欄ある門 格子づくりの門 一步遠 一步正に門に

入らむとして

打 個照面

打 Their eyes met.

如何我留連於此門前

如信婢娼解悟人

始知美人即娼人

饑

餓口也

武陵源

庭軒 庭前之花

Labyrinth

読

者 回話せしめむ

着 をして 着小生

能勾 〓 能

道し請科 moving to sit down

少 〓 欠

因甚 何によつて

可也 然れ共亦

甚的 如何が

衝 真に

待聴

奈 如何せん

甚何

(8)

(23)

講

敷 足

懇 願

便 不 if not so

就 即

回 説 返 事

令 尊 父

收 拾 支 度

到 || 却

一 会 一 度

周 方 周 旋

梨 花 深 院 無 人 見

閑 把 寧 王 玉 笛 吹 張 佑 (是 笏 玉) 寧 玉 は 玄 宗 の 子

偷 香 韓 壽 香 を み よ

盼 行 雲 盼 神 女 || 盼 鸞 々

打 当 確 に 見 と め る

謊 仮 也

迤 逗 撩 撥 ひ き い だ す

断 送 殺 役 た ぐ ぬ や う に す る

得 的 同 じ く 助 詞

行 蔵 出 所 進 退 履 歴

偏 向 偏 頗

和 光 包 光

人 情 贈 物 半 張 半 枚 七 青 八 黄 黄 金 の 成 色 と 云 ふ

七 青 八 黄 九 紫 十 赤

(24)

読	拈播	はかる也	
	主張	策	
	艶粧	美人	
	枯木堂	禅堂	
	耳房	角の小室	
	停当	可也	
	的	得 看得	
	行	前	
	央	求む	
	離	意なし	
	便	即 <small>やま</small>	
	可怎生	如何が	
	竝	決して	
	带一分者	者 命令	
	訳	好事	1 道場 法事 (前出)
		2 好事 願	
看停当		見て準備よければ 返事せよ	
走		去る意 走る意なし	
}		拜揖	男子の礼
		万福	女子の礼
個		一個の意	
龐		顔也	
一套		一件 共に一	

(29)

(25)

縞素 白也 喪色;
胡伶又は鶻伶 伶俐の意、(鶻眼の鋭より云ふと云ふも音訛也)
漆老 眼也
儷睛 儷看 流眼
眼裡 儷看也
抹 一字を抹する動作 ちらりと見る也 (一抺輕烟の如し)
他ノ多情小姐 鶻々 他は二人称 紅娘也
紅娘を下女として賦役に服せしむる事をなさし
許放 放つをゆるさしめずば奴隸なれば也
写与 讀文を書きて
従良 奴隸を開放して良人に従はしめむ
崖家女 紅娘也 艶粧と云ふ 縞素と云ふに矛盾す
潔郎 和尚 (元語)
演撒 からかふ からかひに来たのでない事はない
何として流眈に汝の頭上を見て禿頭光沢々たらしめむや
見 眩人貌 めかして来て人にこびる事かあらう
聞○かなかつたからい、か 若し紅娘か之を知つたら
洞房 華燭 洞房は寺の本殿と 新郎新婦の闇とを
併せ云ふ 和尚を揶揄一番する也、
好模様 (法本を賞する也 大模大様とも用ふ) 莽撞は
劍つくを食はす つきかゝる 小言を云ふ
怪不得 不得怪の意 記得 □得等の間に不を入るゝは俗語也
梅香 ヲ頭也 侍婢也

(26)

(26)

	勾当 幹事 用事也
	口強 強弁
	硬抵着 硬くして (顔の皮を厚くして)
	撞す つきかゝる
	禫服 喪あけ也 (父母の喪は三年)
	哀々父母 生我劬勞 詩經の語
	一陌 百文を投じる
	帶 連帶
	事父母に關す 何ぞ来らざらむ
讀	強如 よりまさる
	能勾 能くす
	到 却つて
	咱 語助 意無し
	聽說 きく
	比及 もし
	合 マサニ
	除 唯
訳	つれさうとまで云はずとも 温玉 唐天宝中 南海より 獻す
蕩	擦也 (元語) ふる、也
	仏を拝するよりも災障を消する事多からむ
	更衣 失礼します (衣をかふる 小用する 等にも) 用ふ
	我不是算命先生
	甲子年 乙丑月 丙寅日
	丁卯時 の如八字にて占ふを算命先生と云ふト人也
	この句 金聖歎本には誰問你来の所にあり

(27)

(27)

授受 手渡す也

瓜田云々 漢詩樂府中の句

納 とる也 いるにあらず

非礼云々 論語

応門 内門也 内門内には五尺の童を入れず

妾だけ事だからまづ御ゆるしも出来ますけれど

干休 やむ そのまゝにしておく

此相思の情はかく如くんば障害に出あつたと云ふものぢや

你心思裡 鶯々の心の中に

颯下 ふりすてる 思をすて、あきらめや^ややうとするか出来ず

赤緊的 堅く

断頭香 若今生並頭蓮

前世焼了断頭香 (金聖嘆本)

香を焚いて釜中に消ゆるときは断頭香と云ひ不吉の兆とす

奇撃 とりさ、げて (娘を也)

温存 Sweet 愉快に感ずる也

眼をたのしませむの意 前の餓眼に対す

巫山 高唐の神女の棲とす

四川夔州府巫山县高唐館神女廟等あり

話をきいてみれば巫山より猶かなたにある 巫山より遠し (夫人治

家嚴)

唐詩云。平蕪尽处是青山。行人更在青山外。此用

其句法 (聖歎第六才子書 註)

本待以下 鶯々の心事を察する也

安排心事 意中の事を整へて 幽客 (一本作遊

客) (張生也) につたへむと思へど自分がかへつて心配だ

(28)

(28)

	乃堂 母
	{ 一本 只恐怕 鷺々の心配也 }
	{ 此本 我則怕 我ハ張生也 }
	卒然 相逢ふては 何郎の粉を見るを 厭ふ事あらむ (註をみよ)
	己の如き美男子をみては 恥ぢてあふのを いやがるであらふ
	況ニ 況味 これだけではまだ風流の況味が十分でない
	親娘 老夫人
	慮過す 考ずぎる
	訪 1 一本に日彷彿也
	2 訪 訪問也 相訪ふを得べしの意 1の解可
	徳言 四徳あり
	恭儉温良 論語中の語也
読	到 反つて
	捱 サ、フ
	抵 サ、フ
訳	他 鷺々
	臉兒 顔也
	搽胭晃 原本 は金聖歎本 搽咽項 咽項に化粧をぬるの意
	版本 搽 ^ス 胭晃 ^ス 咽 ^ひ のまはりに白くぬりし化粧がなまめきて
	人を動す (晃に眩人貌)
	翠裙以下 金本 下辺是翠裙……
	上辺是紅袖……
	鸞銷 鸞を染めし薄絹

(29)

読
訊

金蓮は足 玉笋は手

一から思はなければ その方が かへつていゝが
你(鸞)が僅な風韻を落した為に自分は多くの相思情を起した
(撇 ベツ)

塔院 塔傍の庭

一間房 一房也

收拾了 片づける

搬家 引越す

捱 忍ぶ也

簾幕蕭々竹院深 客懷孤憤

耐^マ むくふ

支吾 ささふ 紡し さゝふ也 支持

睡着 睡得の意

飜掌 転々の形容

乍 突然あいたので

索 正に

牙兒 齒 故に頼となる

階 ワレ われら

僂 サ

没端好 無端 はからず也

勾当 事也

深々 丁寧

唱喏 作揖

搶白 やりこめる 一頓 一遍

(30)

(30)

読

僂角 愚人 北人謂不慧之人云僂猶南人云^マ對^ニ
 西廂居跡 鶯々の居跡也
 太湖 蘇州にあり こゝより奇石を出す 太湖石是也
 牆角兒 牆の角也
 丈室 方丈也
 瀉 そゝぐ
 玉宇 無色
 芳心 鶯々の心 鶯々羅袂寒を生じて芳心自ら気がつくだらふ
 (夜がふけし故もう香をたく時分だと)
 我便直至鶯庭 (金聖歎本)
 可憎 可憎可愛人 鶯々
 角門兒 牆角の小門
 放置
 彈 たる
 恁般 かくの如く
 擘 方言 美也 よしと訓ず
 兀的 正に
 好 甚 清新之詩
 快 早シ (好甚)
 行道 信又
 倍 陪也
 枉 空しく (耽病)
 呀的 ぎいつと
 衣香細生 金聖歎本

訳

(3)

(31)

春嬌 美人也

広葉宮 月殿 (太陰なれば広葉と云ふ) 玄宗帝、夢に一宮に至る
扁に之を書す人に問へば月宮也

姮娥 有窮ノ后羿の妻

他のかほと 嫦娥と一腹を分つて瓜二つだ

湘裾 湖水の模様のある 裾

湘君 娥皇 (堯ノ女)

湘夫人 女英 (々)

舜 南巡して蒼梧の野に薨す 洞庭君山に死す

蟾宮 嫦娥不死の薬を偷み月中に入りて蟾蜍となる。

蟾宮は月宮也

遮々 樹に遮る、也

掩々も然り

且 暫

姐夫 丈人

拖帶 つれてゆく

剔囀口 まろくけづれる如き

氤氳 二氣相紛糾する意

司馬相如 漢にあり志を得ず蜀中の富人卓王孫の女

卓文君 新たに寡居す相如 王孫に客たり 琴絃を封し

詞を以て文君を誘ふ 文君夜相如に去る。

皓魄 月也

撲堆着 既にあの女の龐の上に愛らしさをつんでゐる

厮覷定 厮無意味也 覷定は認定也 小生を相認めて

(未完)

注

- 1 芥川の帝大時代の聴講ノートは、10冊現存している。そのうち翻刻作業が進んでいるのは、1点（庄司達也、野呂芳信「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 Vol. I」翻刻」（『東京成徳大学研究紀要』2005.3）、「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 Vol. I」翻刻（承前）」（『東京成徳大学研究紀要』2006.3）のみ。
- 2 「芥川文庫」所蔵の『陳眉公批西廂記原本』は全2巻の石印本で、「鼎鑄陳眉公先生批評会真記」「鼎鑄陳眉公先生西廂記」「陳眉公先生評義西廂記」「鼎鑄陳眉公先生批評蒲東詩」を含む。縦18.5cm、横12.8cmの和綴じ本（上巻34p、下巻31p）で、「縮刷影印」「外出する毎に、陳眉公本を懐にして」（塩谷）の記述にも相違しない。
なお翻刻作業に際しては、これをさらに北京国家図書館が編集影印化した国家図書館古籍館編『古本《西廂記》彙集 初集2「鼎鑄陳眉公先生批評西廂記」』（国家図書館出版社、2012.4）を参照した。
- 3 小田切秀雄「はじめに」（稲垣達郎ほか図書委員会編『日本近代文学館所蔵資料目録2 芥川龍之介文庫目録』日本近代文学館、1977.7）
- 4 この方面の最も行き届いた研究としては、須田千里「芥川龍之介文庫和漢所の書き込みについて」（『日本近代文学館年誌 資料探索』2009.10）、同『日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫和漢所の書き込みに関する文献学的研究』（2011、私家版、科学研究費補助金成果報告書）が挙げられる。

翻刻のための参考文献

（塩谷温によるもの）

- ・『西廂記』（昌平公司、1947.9）
- ・『西廂記：擬定本 歌訳付』（養徳社、1958.10）

（塩谷温以外の執筆者によるもの）

- ・田中従吾軒『西廂記講義』（東京専門学校、出版年不祥）
- ・国民文庫刊行会編（代表鶴田久作）『国訳漢文大成 文学部第九巻』（博文館、1921.2）
- ・国家図書館古籍館編『古本《西廂記》彙集 初集2「鼎鑄陳眉公先生批評西廂記」』（国家図書館出版社、2012.4 ※1911年の石印本『鼎鑄陳眉公先生批評西廂記』を影印の形で刊行したもの。）

付記

本報告は、JSPS科研費（基盤研究C・15K02275）「20世紀初頭における「中国」表象の受容・形成・展開についての総合的研究」及び、2017年度恵泉女学園大学平和文化研究所共同研究プロジェクト「中国における近現代「日本」表象の形成と変遷」の助成を受けたものである。